浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

第328号
平成23年2月

電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

【出典】『禅林句集』七言に「一枝梅花和雪香」（一枝の梅花 雪に和して香ばし）、下注に「梅雪中發暗香故也」（梅は雪中に暗香を発する故なり）とあり、出典は未記載。『錦江禪燈』に「不是一番寒徹骨。爭得梅花破雪香。」（これ一番 寒骨に徹せずんば、いかでか梅花の雪を破りて香ばしきを得ん）とみえる。

長い
凍える冬の
風雪に耐え

こらえ
堪えて
雪と和し

自己主張
するでなく
一枝に咲く
梅の花

凛として
仄かなれども
その匂い
清く芳し

一輪でよい
我が心にも
咲かせたい

一枝梅花

早春の微妙な趣を詠んだ俳句として、松尾芭蕉の高弟であった服部嵐雪の「**むめ一輪一りんほどのあたゝかさ**」がよく知られています。一般的には、「梅の花が一輪、また一輪と咲くにつれ、少しずつ暖かくなるようす」と解釈されています。確か、私も学校でそのように教わったように記憶しています。しかし、正しくは「**一輪一輪ほど**」ではなくて、「**一輪一りんほど**」のようです。そこで、漢字で表記し、読点を付け、「**梅一輪、一厘ほどの暖かさ**」としてみますと、ずいぶん印象の違った句となります。この場合、「これまでの厳しい寒さに耐えに耐え、堪えて堪えて、ほんのわずかな季節の変化に、凛として咲く一輪の梅の花」というふうに解釈でき、こちらのほうがいいようにも思いますが、いかがでありましょうか。

ちなみに、「梅」が「むめ」と仮名書きになっていますが、平安時代以降の多くは、そのように発音していたからのようです。ただ、それ以前の万葉集では、現代と同じようにウメと発音していたといい、面白いですね。梅は、奈良時代以前に中国から渡来したものといいますから、ウメにしてもムメにしても、中国語に由来するものと思われます。

梅の字音は、白梅・梅雨の熟語が示すとおりバイですが、それは隋・唐代以後の漢音と呼ばれるもので、それ以前、古代日本に朝鮮を経由して伝わった呉音では、メ（mei）と発音し、それから転化したものというのが有力な説のようであります。

では、本題に入ります。道元禅師が『正法眼蔵』第五十三梅花の巻で、師と仰いだ如浄禅師の次のことばを引用して、仏法の伝播について説いておられます。

「瞿曇、眼睛を打失する時、雪裏の梅花只一枝なり。而今、到る処に荊棘を成す、却って笑う春風の繚乱として吹くことを。」

禅のことばは難解ですので、石田恭二氏の現代語訳を次に示させていただきます。

「釈迦が目を閉じる時、雪のなかに梅花が只一枝咲いている。今到る処、荊を成している、雪のなかの梅花は、却って繚乱と春風に吹かれて笑って咲いている。」

これでも、おそらくまだ歯が立たないかと思います。予備知識として、「**拈華微笑**」という伝承を押さえておく必要があります。

それは、あるとき釈尊が、霊鷲山で、多くの弟子たちを前に、一本の花を手にとって拈られたところ、みな何のことかわからず黙っていたが、摩訶迦葉だけが、その意味を理解してにっこり微笑まれて、以心伝心、正法は、釈尊から迦葉に伝えられたとされる伝説的な故事のことをいいます。

つまり、釈尊が入滅されて久しいわけですが、雪をかぶって寒さに耐えながら、ただ一枝に咲いた梅花を、時空を超えて釈尊が示されている「**拈華**」と見よ、ということであります。

次元が低くて申し訳ないですが、私が子供の頃、ゲルマニウムラジオといって、電源を使わず、イヤフォンで聞く、極めて単純なラジオを作ったことがあります。それでも、雑多の電波が乱れ飛ぶ中、うまく波長が合って、音が聞こえたとき、とても嬉しかったことを今でも覚えています。宗教的意味合い、媒体の違いはあるかもしれませんが、釈尊の教えが、直に自分に飛び込んできたと体感できたとき、嬉しいのです。そのような喜びを、法悦といいます。「春風に吹かれて笑っている」とは、そのことであります。

私どもは、人によって差はありましょうが、進歩発展、成長することを望んでいます。人の話を聞いたり、本を読んだり、学習をし、研鑽を重ねることによって、心身の向上を願い、そのように心掛けていれば叶うと信じています。もちろん、それは本当でありましょう。しかし、自分自身省みまして、仏法について、それなりに学んでいるつもりでも、つまらんことで腹を立てたり、些細なことで気を病んだり、愚かしい自分に落胆すること、日常茶飯であります。

ここで再び、嵐雪の句に戻ってみることにいたします。

春は毎年巡ってきます。釈尊が示される梅花の「**拈華**」に、微笑み返すことができるか。我が心に一輪の花でもよい、芳香を放つことができるか。わずか一厘でもよい、我が心の成長を確かめることができるか。春そのものが仏法であり、その温もりを感じ、そこに浸る喜びを爆発させることができるか。それは、日々精進を怠らぬ者だけの特権ではありますが、そんな思いで、「**むめ一輪一りんほどのあたゝかさ**」を味わってみてはいかがでありましょう。

春が来ます。どうぞ梅を見にお出かけ下さい。

第23世 中興慎空道研上人諦道和尚 12月18日遷化　行年97歳

当山潮音寺第23世、慎空道研和尚が、昨年暮れ12月18日に、97歳をもちまして遷化いたしました。

私にとっては、師僧であり、父でもあるわけですが、小学校の四年生の時、先々代である道闡和尚から、「寺の小僧にならんか。まんじゅう食わしてやるぞ」といわれて、二番目の弟子になったと聞いております。親元を離れ、辛いこともあったでありましょうが、私どもには、その当時のことを語ってくれたことはありません。

自分が親の愛情を知らずに育った分、父親としては、不器用であったように思います。しかし、やるべきことを、ただ、黙々と体で教えてくれました。九十を過ぎて、日々衰えていく中、「老い・死とは何か」ということも、自身の体で見せて、教えてくれました。これは、最後の教えとして大事にしていきたいと思っています。

これまで、長きにわたってのご厚情、心より感謝申し上げます。12月22日の葬儀には、多数の方々にご参列いただき、厚く御礼申し上げます。ご連絡等で、不手際があったかもしれません。深くお詫び申し上げますと共に、遺された寺族一同、今後とも宜しくお願い申し上げます。

雑記

▼梅花粧

今回、梅のことをあれこれ調べておりましたら、昔、中国に梅花粧なる化粧があったとか。

南朝宋の武帝（在位420-422）の女、寿陽公主が、人日の節句（旧暦正月七日）に含章殿の梅の木の下で眠っていたら、梅花が散り、その一片が彼女の額について離れなくなり、宮人、額に梅の花びらをかたどった化粧をほどこしこれにならったという。これを梅花粧、寿陽粧ともいうそうです。

▼梅もどき

これも調べておりましたら、梅擬、黒梅擬、蔓梅擬、色々あるものですね。まがい物と呼ばれても、中には雁擬から飛竜頭に、本物を超えたものもありますが……。

◆梅一輪翳す仏の影を追い　沐魚